

# 中世文学における乞食の言説をめぐって

石黒 吉次郎

## 一、はじめに

『源平盛衰記』卷四十四の「平家虜都入り附癩人法師口説言並戒賢論師事」に、次のようなことが見える。

平家が壇ノ浦の合戦で滅んだ後、平宗盛等平家の人々が源氏軍の捕虜となり、京都へ連れ戻された。彼等は浄衣を着て牛車に乗せられ、前後の簾を巻き上げられて、京都の人々の眼にさらされた。京都の貴賤・老若が押し寄せ、かつて繁栄した平家がすっかり零落してしまつたさまを見て涙を流し、袖を絞つた。今は源氏の世とはなつても、昔の平家の恩を忘れないものも多かつた。この見物の人々の中に、乞食の癩人の法師達十余人が杖杖などを突いて立ち並んでいた。その中で年長の者が鼻声で人々に語つていた。

人の、情を知らず法を乱るをば悪しき者として、不敵癩ふてかたゐと申したり。されどもこの病人達の中にも、不敵ふてたるもあり、不敵ならざるもあり。又直人ただひとの中にも善者も不善者もこもこもなり。世の習ひの癖なり。<sup>①</sup>

と、悪人を俗に「不敵癩」というが、この病者には悪人もいれば、そうでない者もいる。普通の人に善人と不善者がいるのと同様であると述べて、この病が悪を犯したためのものではないことを強調する。そして平家批判の論を展開してゆくが、この一文は批判者としての自己の立場が正当であることを示すものともなつてゐる。この批判は多くの見物人が平家に同情的であるように描写されているために、際立つてゐるものである。『盛衰記』の作者の意見の一端を代弁させているとも見ることができよう。次いで「此法師加様の病を受たる事此七八年也。」と自身の来歴を述べ、

さしに

当初事そのまの縁ありて文章博士殿に候ひし時、田舎侍に小文を教へられしを聞けば、「世は人の持つにあらず、道理の持つなり」といふ事を讀まれき。又清水寺に詣でて通夜したりし時、參堂の僧の中に法華經を訓に綴り讀むあり。近付き寄りて聴聞せしかば、「不信の故に三惡道に落つ」と讀まれき。この内典外典に教へたる二つの事、耳の底に留めて明暮忘れず、心の中に持たれて候ふぞ。

と語る。この法師は漢籍と『法華經』の講釈から、道理と信仰心の二つを学び、前世においては不信であり、道理を知らなかつたために、この世で病苦を受ける身となつた。そこで今は、「道理をば背かじと不信ならじ」と思つて過してゐると述べる。この法師の眼から見れば、榮えた平家が滅んだのは、故平清盛が道理を知らない人で、不信のあまり三井寺と興福寺、東大寺大仏を焼き滅ぼしたためであるとする。これを聞いた朋輩の乞食は、御房のおっしゃるように、人と生れて仁義を顧みず、恥を知らない者は、「人癩ひとがたい」という。壇ノ浦で平家一門の人々は皆海に入ったのに、あの内大臣（宗盛）は恥知らずな人で、「人癩の上臈癩」である。つまりは我々と同族である。しかも我々よりは劣つてゐる。さあ御房達、内大臣が通るときは、「辱はぢ辱のなかくに爪つひず、勘当かぶるに齒かけず」と、拍子にかかつて舞い踊らん言つた。人を辱めるために、即興の戯れ言を言い、舞い踊ることについては、以前乱舞の發生と関連づけて論じたことがある。

これを見聞した人々は、厭わしい姿の者達がよく物事を心得ていることに感心した。すると傍らの僧が天竺の戒賢論師という法相唯識の僧について話し始めた。大小乗の奥義をきわめ、有空中の三時教を立てた高僧であつたが、癩病に罹り、治療の方法もなく、自殺を決意した。そこに天人が下つて、今は空しく身命を捨てず、仏法を広めるべきであることを説いた。そこで捨身をとどめて待つてゐると、玄奘三藏が天竺にやつて来たので、これに五相宗の教え

を伝え、その後論師は重病を厭って自殺を遂げた。深い悟りを得た者であっても、人の身である以上、病から逃れることはできない。心ある者は淨い心を持つはずだから、この癩人法師のような乱僧（私度僧・散所法師など）であっても、心まで拙いものでもない、という意見であった。その後内大臣を乗せた牛車が近づいたので、上下色めき立つと、大勢の武士がこれを警護して雑人を追い払ったので、口達者だった乞食法師原も、蜘蛛の子を散らすように逃げていってしまったという。

この『源平盛衰記』の話は、洛中の病人法師の生活の一端を示すものとして興味深く、その意見・問答にも何かしら面白さがある。この話のように、もとはそれなりの身分であった者が、その病のために身を落とし、物乞いの集団の一員となって生活する人々がいたのであろう。後代の物語ではあるが、難波の四天王寺に住む盲目の乞食を描いた能「弱法師」（説経節では「しんとく丸」）の俊徳丸の生活と意見に共通するものがある。この能も身分ある者の成れの果てを描くものである。近世演劇の「非人の敵討」の先蹤である。また『平家』のこの箇所は、捕虜となった平宗盛が都大路を渡された時の様子をよりリアルに叙述するものであり、そして武士達に追い散らされたという乞食法師達の話は、実話に近いものであろう。その場に居合わせた人が興味深くこの出来事を記憶していてほかの人達に語り、それが『盛衰記』の取材源となつていると思われる。まさに『徒然草』百四十二段の、「心なしと見ゆる者も、よき一言はいふものなり」という中世人の感覚が働いているのである。ちなみに覚一本『平家物語』巻十一・一門大路渡にはこの逸話はなく、平家の人々が疲れた姿を大路に曝す様を、やや観念的に、感傷的に語っている。見物の人々も「袖をかほにおしあてて、目を見上げぬ物もおほかりけり」とする。語り本系と読み本系の間形態本の一様である百二十句本『平家物語』巻十一・平家一門大路渡しも、覚一本とはほぼ同様の内容である。しかし見物のある人が、

（宗盛が）一年内大臣になりて、祝ひ申しのありしとき、公卿には花山の院の大納言、やがてこの平大納言もお

はしき。…今は月卿雲客一人もともなはず。<sup>(3)</sup>

と言ったという一節があり、これは平家の落魄に対する感慨を表わしたものであるが、『盛衰記』の乞食法師の感想に構想は似ている。覚一本では、「一年内大臣になりて…」の一節は、地の文に融け込ませており、新しく整理した跡が見られる。さらに延慶本『平家物語』第六本・平氏虜共入洛事にもこの話はなく、覚一本に近い構成で叙述がなされている。長門本『平家物語』卷十八・宗盛清宗父子被レ渡二大路一も平家の没落を目の当たりにして、人々は涙を流して同情したとあることを記すのみである。すなわち多くの平家物語諸本が栄華を誇った平家一門の衰退に深い感慨を持つてこれを憐れんだとし、それをこの箇所テーマとしてしているのに対して、『盛衰記』だけは平家の悪を論じ、これを批判する別のテーマを持ち出し、差別されていた下層の法師にこれを主張させているのである。ここにも『盛衰記』の独自の性格が読み取れるであろう。

小林保治編『平家物語ハンドブック』では、『源平盛衰記』に関する性格づけとして、『平家物語』の異本を参照しつつ編集されたとみられる、劇的な構成法を好む、詳細な描写を繰り返す、異説を並べ立てる、文書類を多く収載する、事物の由来を解説する、暴露的記事を好む、猥雑ないし荒唐無稽な逸話を導入する、教訓めいた結論を引き出したがるなどの特徴が従来指摘されているとしている。先の『盛衰記』の箇所も、これらに該当することが言えるであろう。ところでこのハンドブックの解説では、『盛衰記』にも独自の世界を指向した面があり、物語の末尾が他の読み本系のそれと異質なものがある、平家の嫡流六代の死を叙述せずに、長谷観音の靈験譚で結ぶという点が特異であるとしている。<sup>(4)</sup>筆者も『盛衰記』中の記事の面白さには注目してきたのであるが、独自性を持ったこの箇所も印象に残るものであった。この法師の話の特異性は同書卷四十七・北条上洛尋二平孫一、附鬻饑尼御前事にも通じる。これは信西の孫で藤原成範の娘新中納言の局が、平重衡との間に若君をもうける。北条時政が上洛して平家の子孫を尋ね

殺したため、我が子も殺される。しかしその首を離さず持ち、乞食修行者の様となって、難波の海に入水するというものである。これも身をやつした髑髏の尼の異様な姿が印象的である。『四天王寺年中法事記』（『四天王寺史料』所収）にも取られているものである。この話は延慶本、長門本などに見え、その異同や基盤、生成等については浜畑圭吾氏の論がある<sup>5)</sup>。

先の『盛衰記』の逸話と似ているタイプのものは、『発心集』巻五・十二話・乞児、物語の事である。ある上人が外出した先で、乞食三人の会話を聞いたというもので、一人が「近江という乞食は運がよい。坂で乞食の共同生活をして、三年もたたないうちに、宝鐸（大型の鈴）を持つことを許された」と言うと、もう一人が「それは前世からの運命である。品のない言い方をするな」と答えた。するともう一人が、「これを聞くと、自分の事を仏菩薩は何かにつけて、愚かなことをしていると御覧になるだろう。恥ずかしいことだ」と感想を述べた。これは清水坂周辺に住む乞食の話であろうが、非人の賢明さを伝えるものである。なお非人の乞食の集団にも身分秩序があったらしいことも知られる。『発心集』巻四・四話・叡実路頭の病者を憐れむ事は、比叡山の僧叡実が帝の病氣祈禱に向かう途中、道端で病人が苦しんでいるのを見かけ、これの世話に専念したというもので、高僧の身分の賤しいものに対するまなざしの話の系譜があったのである。さらにこれに加えて想起される話は、『伊勢物語』八十一段である。左大臣源融が賀茂川ほとりの六条院で神無月の頃夜を徹して宴を催した折、人々が皆歌を詠んだのち、板敷の下にいたかたる（乞食の障害者）の翁が「塩竈にいつか来にけむ朝なきにつりする舟はここに寄らなむ」と詠み、感心されたという。いずれにせよ一般人で、治療の見込みの立たない病者は、乞食として生活をせざるを得ない時代であった。

## 二 癩をめぐる背景

癩に関する歴史的な事象や文学との関わりについては、これまで研究が積み重ねられてきた。勿論この問題は、日本のみならず、世界的な視野へと広がる問題である。古くは『旧約聖書』民数記に見られる。ハインリヒ・ブレティヒヤ著の『中世の旅 都市と庶民』（関楠生訳）では、

中世の諸都市では、癩病は神の咎しととされた。…それから人々は、おごそかな行列を作つて、葬いの歌を歌いながら、病人を市門の外の癩者の家に連れて行つた。この家が、そまつな小屋だった場合も多い。<sup>(6)</sup>

と中世ヨーロッパにおける実態を記している。また「コンスタンティヌス大帝の寄進状」なる偽造文書には、コンスタンティヌス帝がまだ異教徒だった時、癩病に罹つた。そこで異教の司祭達は幼児を殺し、その血で湯浴みして治すように勧めたが、帝はその母親達の悲しみに打たれて、それに従わなかつたとある。<sup>(7)</sup> またこの病気の人々の救済に当たつたのも多くは宗教家であつた。仏教説話では、『今昔物語集』卷六・六話に、玄奘三蔵が山中でこの病の者に会い、その膿汁を口で吸い取つて治してやつたという話が見える。出典未詳とされている。

この病について、『法華経』普賢菩薩勸発品には、この経を受持する者の悪口を言えば、白癩になるとあり、『智度論』卷五十九では、諸病のうちもつとも重いもので、「宿命罪因故難」とする。鎌倉時代の僧医梶原性全著の『頓医抄』卷卷三十四には秘伝があり、この病気は前世の罪業、仏神の冥罰、食物、四大不調が原因で起こるとある。<sup>(8)</sup> また盛田嘉徳著の『河原巻物』では、この病に罹る人があると、賤民とされた人々に託したり、死後の後片付けを任せたりすることが多かった。彼等に世話を頼むどころか、河原に委棄することも少なくなかつたとしている。<sup>(9)</sup> そして仏教関係の人々が多く患者の救済に当たつたのも事実である。仏教に深く帰依した光明皇后が湯屋で頼の病の人の垢を摺ると、これが阿闍仏であつたという話は有名である。もとは『三宝絵』卷下・法花華嚴会に、光明皇后が悲田院と施薬院を

立てて病気の人々を養ったのみであったが、これが『宝物集』巻六になると、癩の人の垢を摺ったところ、先のようにこれが阿闍仏であったという話になる。『建久御巡礼記』では清水坂の乞食の垢を摺ったとあるが、これはこの坂の癩人のことである。<sup>10</sup>この話は『元亨釈書』第十八、『法華経直談抄』五末などに見え、中世流行したものであった。癩はその病気の性格から特に恐れられたもので、その恐怖感の中世に入って、仏教の罪悪感と結びついて、広く深く浸透していった。また逆にその異様、異形には何かしら異界の神聖さを感じさせるものがあつたようである。この点に関し、網野善彦氏は『中世の非人と遊女』において、

私自身は、乞食、病者を含む非人…が、中世前期の社会のなかでは、凡下、百姓、あるいは下人と異なる神仏の直屬民―神人・寄人・供御人と本質を同じくする身分として、神人・供御人制の下に位置づけられているとみて、これを「職人」の一種と考えており、…<sup>11</sup>

とすることを想起させる。さらに氏によれば、非人が賤しいとされたのは、中世以降のことで、中世前期においては、聖なる存在として畏れられた一面があつたという。これに対し、金井清光氏は、『中世の癩者と差別』において、

網野氏ら一部の歴史学者や民俗学者の中には、中世の乞食・非人・癩者らに普通の健康者には無い聖なるものを認め、神にも通ずる神秘的な存在であると主張する向きがけっこう多い。しかしそれは中世の説話や寺社縁起等の「作り話」に登場する非人・癩者らの奇跡を歴史的事実と早合点する誤解であり、…<sup>12</sup>

と反論する。しかし異形の者にそうした聖なる性格を覚えることは、来訪神の信仰と結びついて説話に多くある。仏教説話でも仏菩薩が病者や乞食などの化人に扮して人々の慈悲心を試す話は『今昔物語集』巻六・六話の玄奘三蔵の例など多くある。『感身学正記』によれば、鎌倉時代の真言律宗の開祖叡尊は、『文殊師利涅槃經』の説によって、忌み嫌われた非人を文殊菩薩の化現とし、非人達を供養したという。

またヨーロッパにおいては、北欧神話の主神オーディンは、しばしば乞食の姿をして民家を訪れるという。聖なるものと賤なるものが表裏の関係にあることは、能にはしばしば見られるものである。『日本霊異記』巻中・十五話は、伊賀の国の高橋連東人は、母の供養に般若陀羅尼のみ誦持する乞食を師として呼んだことを記している(この話は『三宝総』巻中、『今昔物語集』巻十二に等に受け継がれる)。そして酒井シヅ氏によれば、癩の人々の生活も確かに宗教的なものに結びつくことがあった。清水坂や奈良坂の癩者は、年に何度か町に出、「ものよし」と呼びながら勧進した。ものよしは縁起が良いという意味で、彼等に施しをすることは功德になることで、人々は喜んで喜捨をしたという。<sup>13)</sup>

### 三 癩をめぐる説話

癩についての中世史からの研究成果は多くあり、その実態が解明されつつある。また癩とはハンセン病だけではなく、広く皮膚病についていう語であることも知られている。<sup>14)</sup> 癩と文学との関わりは、古代から近現代に及ぶもので、近代小説では、島木健作の『癩』(昭和九年)、北条民雄の『いのちの初夜』(昭和十一年)などが知られている。海外では、聖人が我が身体をもって癩病の人を看護するG・フロバールの小説『ジュリアン聖人伝』(一八七七年刊)などがある。

古代の仏教説話では、先の『法華経』普賢菩薩勧発品に見える教説の影響が強い。『日本霊異記』巻下・二十話には、光仁天皇時代、阿波の国名方郡の女が麻殖郡の菟山寺で『法華経』を书写した。麻殖郡の忌部の連板屋が女の過失を顕わして誇ったところ、板屋は口がゆがみ、顔が後ろに捻じ曲がって戻らなくなった、と記した後、『法華経』には「この経を受持する人を誇ると、身体に異常が生ずる」「この経を受持する人の過失を顕わすと、事実かどうかにかかわ



らず、白癩を得る」とある、といった評語を加えている。『今昔物語集』巻二十・三十五話では、比叡山の僧心懐が美濃の国に行き、そこで一の供奉ぐぶとして尊敬された。ある時疫病が起こり、これを鎮めるために南宮社にて仁王講が行われた。その代表の講師は心懐ではなく、懐国供奉が当たることとなったため、心懐は怒り、その講の座に乱入して暴れまわった。その後心懐は京に上ったが、白癩という病が付いてしまったという。逆に癩を治癒するのは『法華経』であるともされた。『今昔物語集』巻七・二十五話には、震旦の話として、唐の高宗の世に僧徹という僧がおり、山で癩病の者を見つけ、住処に連れて帰り、これを養った。また『法華経』を教えて読誦させたところ、病が癒えた。その後この者は僧徹の弟子となり、病気の人々を癒すようになったとある。『冥報記』巻上・三話に拠るといふ。

このように古代においては、癩人にまつわる説話が仏教と深く結びついて説かれるのであるが、中世に入ると、社会に生きる病人の姿として、より現実的な描写が見えてくる。明恵上人の伝記には、上人と癩との関係記事が見えるが、それを『高山寺明恵上人行状（仮名行状）』に拠って示す。

一文治四年戊申生年十六歳ニシテ舅上覚上人ニ付テ出家ス。…又先年紀州下向ノ時、藤代ノ王子ニシテ癩病人ヲ見ルニ、或人語テ云ク、人ノ肉ハ癩病ノ良薬ナリ云々、心ニ思ク、我コ、ロサス所、自本菩薩修行ノ如ク、一切衆生ノタメニ頭目手足乃至身命マテヲモ捨ムト思、誰人カソノ完（空）ヲサキテ此ヲスクハム、尔者我カ身肉ヲサキテ此癩病人ニ与テ此苦ヲスクフヘシ思テ、上洛ノトキ人ニモシラレスシテ刀ヲトキマウケテ持シテ藤代ニシテサキノ癩人ヲタツヌルニ、纔ニ飯舎ハカリ残テステニ死セスヨシヲ聞、遺恨ニ覚テ上洛シ畢、

これは明恵が十六から十八歳の間の出来事のように、「漢文行状」もほぼ同文である。明恵が若い頃癩の人の姿を見、我が身を裂いて肉を与え、これを養おうとしたという。明恵はこうして真摯に癩者と向き合い、自らの菩薩修行のため自身の体を犠牲にしようとしたのであった。『五門禅経要法』にある、

釈迦文仏の如くは太子たりし時、出て遊覧するに一癡人を看見す。即ち直に勅して言く、当に須く不死人の血を飲ましめ、髓を塗らしめば、乃ち養ゆるを得べし。<sup>(16)</sup>

を實踐したものであった。藤代の王子は熊野に通じる道筋にある有名な神社であるから、この病人は熊野に參詣する人々に喜捨を乞うていたのである。熊野周辺にこうした人々が多くいたことはよく知られている。こうして中世においては、この病に悩む人々を見つめるまなざしが記録されることになる。実際に僧が道端の病者を助ける話は、先述のように『発心集』巻四・四話・叡実、路頭の病者を憐れむ事に見える。比叡山の僧叡実（十世紀後半の人か）は、高僧の聞こえがあり、天皇の御脳の祈禱に招かれて辞退し続けたが、断りきれなくなって參上する道すがら、動けなくなっている病人を見つける。叡実はこれを憐れみ、仮の小屋を作り、食物の世話をし、「帝の御事とても、あながちに貴からず。かかる非人とても又おろかならず」と言つて参内を取りやめたとする。この非人の病者は、人が「厭ひきたなむ」とあるから、癡の可能性があるが、『元亨釈書』では「狂病」としており、神経系統の病気としている。どちらにせよ人の忌む病で、辺境に暮らさざるを得なくなるものであった。これは鎌倉時代の忍性による本格的な貧しい病人の救済に先立つような話である。忍性の師叡尊は、『関東往還記』の中で、弘長二年（一二六二）五月・六月、疥癩宿で病者に食と戒を与え、受者は慚愧の涙を流したとあるから、彼等には仏教に結縁する機会も与えられた。

次に癡の人の言動に関する説話は、『古事談』巻三・八十一話・清水の癡者、問答智海法印に勝つ事に見える。智海法印は十二世紀の延暦寺の僧で、ある時清水寺に詣で、夜更けに帰途に就いた。五条の橋の上で、「唯円教意逆即是順、自余三教逆順定故」と誦する声が聞こえた。近寄つて見ると、白癡の人であった。法文をめぐつてこれと問答すると、智海の方が言い負かされてしまった。智海はこれほどの学生はいないと居所を問うと、清水坂の者と答えた。その後智海はたびたびそこを尋ねたが、二度と会うことはなかった。そこでこの者は「若しくは化人か」としている。この

僧は清水坂に住む非人達の一人であったのであろう。もとは学識ある僧であったが、業病に侵され、この地に住むことになったと思われる。この人物は、『盛衰記』の癡人法師以上の知識を有していたのである。この説話は『宇治拾遺物語』巻四・十三話・智海法印、癡人法談事に同文的に見える。ここでは末尾は「もし他人にやありけんと思ひけり」としており、この「他人」はやはり他界の人の意味なのであろう。先の「化人」は神仏の化現の意であるが、ここでも仏法に到達した癡の人を神仏に近い神秘的な存在としており、異形の者を聖なるものとする伝統的な感覚が働いている。この話は『癡心集』巻四・三話、『撰集抄』巻五・八話、『閑居友』巻上・七話等に類話があることが指摘されている。<sup>15)</sup>『癡心集』では、智海ではなく、近い頃の永心法師のこととしており、この法師が清水に百日詣でをし、日暮に帰途について鴨川の河原で泣く者と出会った。この者は「かたは人」の病者の乞食で、苦しさに河原で足を冷やしていたのであった。またこの者は昔比叡山にいて、昔学んだ唐の天台宗中興の祖湛然の釈に「唯円教意、逆即是順、…」とあるのを思い浮かべ、その趣旨を心静かに思い続け、その貴さに泣いていると永心に語った。これは先の『古事談』や『宇治拾遺物語』にある類話よりも自然な説話になっており、こちらが本来のものかと思われる。そして先にあげた癡人とこの病人の乞食とはほぼ同一のものを指すであろう。こうして癡の人の言説というモチーフは、乞食全体の説話にも敷衍できることになる。

この学識ある乞食法師の話型は、『撰集抄』にも見え、この書の好みのテーマとなっている。第一三話・乞食法師帷返事に、都に筵や薦を着て物乞いする法師がいた。ある人が帷子を与えようとしたところ、「おもふ様あり」として手に取らなかつたとある。筵薦を着てさまよい歩く様は、能「百万」の女物狂百万を思わせる。この能の狂女は長い黒髪を乱し、黛も乱れ、筵切れ、菅薦を着て我が子を求めて狂乱する。さらに古い烏帽子を被っているというのであるから、その姿は落ちぶれて乞食のようになった女性芸能者ということになる。これは当時の市中の物狂いでもあ

り、また芸能者でもある女乞食の姿をリアルに写していると言えるであろう。そのイメージは能「閑寺小町」や御伽草子「小町草紙」の小町にも通じる。さてこの都の法師は、ある時印西を訪ね、法文を求められて、「見るやいかにあだにも咲けるあさがほの…」という世の無常を説く和歌を与えて去ったという。『撰集抄』の編者は、これをたいへん貴い話としている。その裏には遍歴する乞食に、異界とかかわる聖なるものを認めようとする伝統的な感覚が働いていることは想像される。第五・五話・覚尊上人乞食対面事には、駿河の国に食物は魚鳥を嫌わず、薦藁を身にまとい、物狂いのような乞食が庵を結んで住んでいた。ある時覚尊上人が東国に下って、この乞食から物を乞われ、これに法文を請うと、乞食は「なることをばおのが羽風にゆるがして…」という歌を残して去ったとある。これらの乞食は神仏の化人を思わせるものでもある。まさに歌とともに「いとど貴くおぼえ侍る」ことであった。『閑居友』巻上・七話・清水の橋の下の乞食の説法事も先の『靈異記』巻中・十五話の話に似るもので、清水の橋の下に住む乞食、かたは人がさる大臣の仏事に赴き、日頃の姿のまま勝手に高座に上り、すばらしい説法をしたというものである。人々は、「昔の富楼那尊者、形を隠して来たり給へるか」と思つて感嘆したという。

このような例を見ると、清水周辺の非人の中には、昔はかなりの学僧であったが、病気のために身を落とす形での地に住むことになり、その逆境のためにますます心を澄ますことになった人々がいたのではないかと思われる。なお『閑居友』巻上・八話には、東国に啞の真似をし物を叩いて乞食をする上人がおり、天台の法文を言い捨てて去った話がある。またこうした説話は清水周辺にとどまるものではない。天王寺もまた『一遍上人絵伝』に見るように、車のついた移動小屋に住む乞食の人々がいたことで知られているが、『発心集』巻一・十話・天王寺聖、陰徳の事、付乞食聖の事に、天王寺には言葉の末に「瑠璃」と付ける聖がおり、ぼろを身にまとい、物狂いとなって乞食をしていた。近くの大塚の智者の家に雨宿りをした際、夜もすがら主に天台宗の理を聞き、今は疑問が解けたといつて帰つて

いった。智者があたりの人々に珍しいこととして話したところ、ある人々は権者（仏菩薩の権化）かと疑ったとある。これは必ずしも病人ではなく、陰徳の狂気を装う僧の系列に属する人であろう。これの付話に、仏みやうという乞食の聖がおり、これも物狂いの体で、食物には魚鳥を嫌わず、筵・薦を重ね着して、人に会うと、必ず「あま人・法師・をとこ人・女人等清浄」と言つてはこれを拜んだ。人々からは気味悪がられたが、阿証房と懇意にしている、これから経論などを借りては学んでいたとある。これは京都の話であろうが、これも天王寺の聖と同種の人で、みすばらしい乞食の中には、学識ある者がいたことになる。

以上の説話はやや観念的で、美談風に作られているものであるが、『沙石集』卷三・一話・癡狂人ノ利口ノ事（梵舜本の表記）は、病気を持つ人の話としてよりリアルな面がある。ある里に癡狂の病を持つ者がいた。ある時大河の岸で発作を起こし、河に落ちてしまった。気絶したまま流されてゆき、中洲の先端にたどりついて、そこで息を吹き返した。そこで「死タレバコソ生タレ。生タラバ死ナマシ。カシコクゾ死ニケル。凶ニ死ヌランニ」と述懐した。意欲があつたら深い河の底に沈んで助からなかつたであろうが、かえつて気絶していたからこそ自然に流されて助かつたのだというものである。無住は、「死タレバコソ生タレ…」云々の逆説的な言い方に「利口（表現の巧みさ）」を見出しているのである。この病気はここでは火のほとり、水のほとり、人が多く集まる中で起こる厄介なものとしていえるが、その病を機に一種の悟りを得ているようなところが先の『盛衰記』の癡人法師の心境に似るものがある。『沙石集』のこの箇所ではこれを枕とし、「劣タレバコソ勝タレ、勝タラバマケナマシ」という利口をあげたり、出家は四海を家とすべきで、「家ナケレバコソ家アレ、家アラマシカバ、家ナカラマシ」とし、唐の郎将は勲功をあげながらも出家し、これを不審に思った同従に対し、「我狂ハ醒ナムトス。汝ガ狂ハサカリニオコレリ」と答えた等の利口をあげて、出離の重要性を説くなどしている。

このように重い病気にかかった人が、その深刻な状況故に真理に達したことを言う話には興味深いものがある。『今昔物語集』巻四・九話は天竺の陀楼摩和尚の話で、和尚がある里に行つたとき、林の中に一人の比丘がいて、座つたかと思えば立ち上がり、立つたかと思えば走り、廻つたかと思えば臥したりして、物に狂う状態であつた。はなはだ落ち着きのない状況だったのである。和尚が近寄つてどうしたことか尋ねると、比丘は「天二生ルト見レバ人二生ヌ。人二生ルト見レバ地獄二堕ヌ。…三界ノ定メ無キ事ヲ知レカシト思テ、カク年来廻リ狂ヒ特ル也」と答えた。これは「利口」という言葉の段階ではなく、六道輪廻の理を、身体をもつて示していることになり、病氣と正常との境もはや区別がつかなくなっている。また異常と聖性の問題でもある。この話は『心性罪福因縁集』に拠るといふ。<sup>18)</sup>

その他『発心集』『閑居友』『撰集抄』には、非人、乞食、盲人などの説話が見える。これは当時の人々、おそらく出家者がこれらの人達に関心を寄せるようになったためであろう。鎌倉時代は下層の庶民階級をも信者にしようとする新興の仏教教団の興つた時期で、これに対する旧仏教側の活動も活発化した。そうした時代の動向ともかわるものであろう。仏教界はもう一度仏教の原点に戻ろうとしたのかも知れない。『発心集』巻八・五話・盲者、関東下向の事には、盲目の琵琶法師が小法師を一人連れて、訴訟に向かうわけでもなく、「ただ世の過ぎがたさに、もし一日も過すばかりの事もや」と苦しい旅を続ける様が記されている。先の『閑居友』巻上・七話・清水の橋の下の乞食の説事は、乞食姿の法師が大臣の邸で法事の導師を勤めたが、「乞食、かたは人」と評される障害者であつた。『撰集抄』巻七・三話の、相模の国大庭で、疫病で夫をなくし、我が身も病に侵されて苦しみ狂つていふ話もリアルである。『撰集抄』巻三・二話・天台山静円供奉事には、ある時摂津の国住吉大社で仏事があり、乞食・かたはうどの人々が多く集まつて参詣客に物乞いをした。その中に破れた菴を腰に巻くのみして、鈴を振つて物乞いするものがいた。これが実は比叡山にいた静円であつたといふもので、この僧は早くから世を通れる志が強く、かく乞食にまでなつて身を

隠したとある。そして撰者は、「夫、徳を隠すに多く道あり」として、羊飼いとなったり、おしの真似をしたりした僧の話を先例としてあげている。こうしたものは、『発心集』巻一・一話・玄賓僧都、遁世逐電事のように、鎌倉時代の好みの説話であった。これらの僧達は業病故にやむなく坂や宿に住むことになったわけではなく、自身の生き方の探究の末に、卑賤の身となったのであった。陰徳の僧の話は多くあり、その方面からも聖と賤は表裏の関係にある。これは播磨の国室の津の遊女は普賢菩薩であったという有名な説話（『撰集抄』巻六・十一話・能「江口」）にもつながるものである。

また『元亨釈書』巻十三・極楽寺忍性に見える奈良坂の癩者の話も印象的である。忍性は朝これを背負って店の並ぶ市に連れて行って物乞いをさせ、夕方またこれを背負って奈良坂に連れ帰って数年を経た。癩者は死に臨んで、生まれ変わって忍性を師として手伝い、その恩に報いると言い残したという。

#### 四 中世後期の乞食・病者の説話

さらに乞食・病者にまつわる話を中世後期にまで時代を下げて考える。病者は癩病を含めて、広い意味で穢れとされた。『勘仲記』弘安十年（一二八七）五月四日条に

自今日五体不具依穢不及出仕、神宮辞申奉行了<sup>(19)</sup>

とあるなど、「不具」による「穢れ」の記事が散見する。

下つて『多聞院日記』天正六年（一五七八）八月二十日条には、

- 一 伊賀国ノ女、廿歳ノ前後ナル二人兄弟、癩病ニテ国ヲ出テ、ナラニ乞食テ、未北山ヘモ不入、ツキカキノ下ニアリシカ、今朝少キ蛇、女ノ前ノ穴ヘ入了、苦痛悲歎既可死云々、因果ノ程浅猿々々、<sup>(20)</sup>

という風変わりな伝聞を記している。伊賀の国の姉妹が癩にかかり、奈良までやってきて乞食をし、北山の宿に入らずに街中の築垣のもとにいて、頓死したのであった。これも当時の病者のありさまをよく伝える記事であろう。

ところで中世後期の癩にかかわる物語といえは、説経節の「しんとく丸」がもつとも有名であろう。この物語では継母が主人公のしんとく丸を呪い、それによって両眼がつぶれ、病者となった。そこで父信吉長者はこれを捨てさせた。そのためにしんとく丸は蓑・笠を着けて乞食の身となったとする。この病気は恋人の乙姫によると、「人のきらひし三病者」になったのだという。この「三病者」とは、「ライビヤウ」「クツチ」「テンガウ」の三種で（『日葡辞書』）、ここではしんとく丸がライビヤウに罹ったことを婉曲的に言っていると思われる。この物語は観世元雅の能「弱法師」に取りられている。世阿弥自筆の転写本によれば、弱法師こと俊徳丸は、両眼盲目の身となって、靈験あらたかな天王寺で物乞いをするのであるが、特に癩にかかっているとする箇所はない。よろめき歩くのは、盲目のためであろう。これはこの能は原拠とされる『阿育王経』『今昔物語集』巻四・四話等に見える拘拏羅太子の失明譚に、より近く構想されているためである。この能では主人公俊徳丸が盲目の境涯にすることが中心となっており、その俊徳丸が日想観を拝んで、「紀の海までも見えたり見えたり」と心眼で難波の浦の致景を見渡す場面をクライマックスとしている。この能は、「景清」と同様の盲目物に属するものである。そうした話の背景として、一休宗純の『狂雲集』（五五）の漢詩「盲」をあげる。

瞎驢不受靈山記 四七二三須愧慙 豈墮在光影辺事 銅睛鉄眼是同參<sup>(2)</sup>

これは盲目の者が肉眼以上の、銅や鉄のような優れた眼を持っていて、仏法を会得することを説いたもので、次の「聲」「啞」とともに連作をなしている。これらは平野宗浄氏によれば、『碧巖録』八十八則の玄沙三種病の話に基づくものという<sup>(2)</sup>。この三種の身体障害は、人間のより高次の境地を意味するものであった。当時は禅宗の影響で、盲目



の身であつても悟れば、よくものが見えるようになることが言われたのであろう。これが「弱法師」に影響していると思われる。この曲では俊徳丸が「見えたり見えたり」と述懐した後、「満目青山は心にあり」と、禪語が用いられている。一方四天王寺に集まる病者は、『一遍上人絵伝』では、土車に乗った乞食の障害者が目立つものである。この寺には『盛衰記』に見える髑髏の尼のような精神的に病んでいるかと思われる人々など、世間から嫌われたさまざまな病者がいたであろう。この能は病者の禪的な心境が造形されているユニークな作品である。なお一休の漢詩や『自戒集』には、癩や盲人に言及したものが散見する。これは時に痛罵の比喩ともなるが、彼の近辺には癩に罹つて死去した兄弟子養叟や、恋人の盲女の森女がいたことも知られている。こうした障害者は禅僧一休にとつてもつと特別な意味を持つていたのであろう。市川白弦氏は、癩に苦しんだ養叟をのしる一休に、むしろ彼自身の自戒自虐の呻きがあると説いている<sup>(23)</sup>。

さて説経節の「しんとく丸」では、しんとく丸は明確に盲目にして三病の一つに罹つたとし、癩の身であつたことが語られる。こうした重病は、「をぐり」に見るように、説経節の好みのテーマであり、主人公の境遇を説経節らしくより深刻なものにしたのである。これらはそれなりの身分あるものが落魄し、病者となるが、また復活をとげるのであつて、けつして一般的な庶民的な存在ではない。そこには説話集に見える、僧が病気に罹つて身分を落とす話の継続性もあるであろう。近世演劇の「非人の敵討」物である「敵討襪襦錦」では、武家が非人となつて父の仇討をするものである。説経節のこの種のものでは、主人公が能「弱法師」のように聖域一箇所にとどまつて、その場の有名な人になるのとは対照的に、諸国を巡り歩く。いわば定住型ではなく、放浪型となり、長い物語にふさわしい構想を取る。父に捨てられたしんとく丸は天王寺から住吉へ下り、和泉の国近木の莊へ行き、知らずに乙姫の館に立ち寄つて「熊野へ通る病者に齋料たべ」と物乞いをし、気がついて我が身を恥じ、天王寺に戻つて干死することを決意する。

ここでのしんとく丸は自分の運命を嘆くことはあっても、特に悟りの境地に達するものではない。癩の人々が救済を求めて赴いた熊野へ行くことを断念し、天王寺の床下で憤死する道を選ぶのである。これを救うのは恋人の乙姫であり、二人で詣でた清水観音である。結末では、父の信吉長者はわが子に邪険であったため落ちぶれて両眼潰れ、しんとく丸が安倍野が原で引いた施行にやって来て、わが子に眼を明けてもらうことになるので、「しんとく丸」でも病の中心は盲目ということになり、この点では「弱法師」に近い。この物語では、神仏の力が強く、人間は受身的な弱い立場にあるように構想されており、神仏中心の物語である。なお浄瑠璃の「撰州合邦辻」（安永二年＝一七七三）では、主人公の病は盲目よりも癩が重要な要素をなす。すなわち俊徳丸は継母玉手に恋慕され、毒酒を飲まされて業病となるが、これはすべて玉手御前が悪人から継子を守るための計略で、死に際して自分の生血を俊徳丸に飲ませることによって、病から本復せしめたのであった。我が身を犠牲にして継子を守ろうとする継母の義理を描こうとするものである。癩を治すには、人間の肉や血がよいという伝統があったらしい。また中上健次の『欣求』（昭和五十年）はこれらを下敷きにした小説であるが、女に導かれ、バスで熊野に向かう弱法師まがいの男は、盲目でよろよろ歩き、「人眼をはばかる御病気にかかられ」たとする。この小説はこれら二つの病を意識している。いずれにせよ説経節にあつては、「せんせう太夫」や「をぐり」のごとく、盲目や重い病が重要なテーマをなす。これは比較的上流の身分のもの、落魄とかかわるものであるが、これを救済するのは主人公の信仰心であった。またこれには、「しんとく丸」にその片鱗が見えるように、それなりに富裕な家の出の者であっても、業病故に家を追われ、乞食に身を落とすことがあつたことを反映しているであろう。これは能「蟬丸」のストーリーにも通じるものがある。

能の「弱法師」や説経節における病者・障害者の言説は、信仰心を吐露するものながら、ストーリーは物語風にできていくもので、説話に見られるようなリアルなものではない。もともとこうした社会的に弱者であつた人々の言に、

救済を求めて神仏への信仰心がよく見られることは当然のことであろう。明治初期にできた演劇で、お里沢市の夫婦愛を描いた「壺阪靈験記」も同様である。これに比べて狂言に出てくる病者・障害者の言説は、より社会的な現実を反映しているように思われる。このテーマについてはすでに横井清氏が興味深い論を展開されており、橋本朝生氏の「月見座頭」の論などもある。<sup>(25)</sup>このようにこのテーマは中世において多くの問題をはらんでいる。さらに近世においては、乞食が意外に名句を詠む説話が流行ったということも付け加えておく。<sup>(26)</sup>

## 注

- (1) 以下引用は、水原一考定『新定 源平盛衰記』（新人物往来社）による。
- (2) 「乱舞考」「専修国文」第六八号、平成十三年一月。『中世の演劇と文芸』（新典社、平成十九年）所収。
- (3) 新潮日本古典集成『平家物語』（新潮社）による。
- (4) 三省堂、平成十九年、二八～二九頁
- (5) 『平家物語語生成考』（思文閣出版、平成二十六年）第四編・第三章「髑髏尼物語」の展開
- (6) 白水社、昭和五十七年、八七頁
- (7) 世界の歴史3『中世ヨーロッパ』（中公文庫、昭和五十八年）七〇～七一頁
- (8) 服部敏良氏の『鎌倉時代医学史の研究』（吉川弘文館、昭和三十九年）に、『頓医抄』の詳しい研究がある。
- (9) 法政大学出版局、昭和五十三年、一七三頁
- (10) この説話については、阿部泰郎氏の研究が有名である（『湯屋の皇后』名古屋大学出版会、平成十年）
- (11) 明石書店、平成六年、八六頁

- (12) 『中世の癡者と差別』（岩田書院、平成十五年）一四～一五頁
- (13) 『病が語る日本史』（講談社学術文庫、平成二十年）一六三～一六四頁
- (14) 黒田日出男『境界の中世 象徴の中世』（東京大学出版会、昭和五十五年）中世民衆の皮膚感覚と恐怖
- (15) 高山寺資料叢書第一冊『明恵上人資料第一』東京大学出版会、昭和四十六年
- (16) 大正新修大藏経卷十五による。
- (17) 新日本文学大系『古事談・続古事談』（岩波書店、平成十七年）三四二頁脚注
- (18) 新日本古典文学大系『今昔物語集・一』（岩波書店、平成十一年）三一八頁脚注
- (19) 増補史料大成による。
- (20) 増補続史料大成による。
- (21) 日本思想大系『中世禅家の思想』（岩波書店、昭和四十七年）による。
- (22) 『狂雲集全釈・上』（春秋社、昭和五十一年）五六頁
- (23) 注(21)の書五七〇頁
- (24) 『中世民衆の生活文化』（東京大学出版会、昭和五十年）三一九～三二〇頁
- (25) 「月見座頭の形成と展開」『能楽思潮』五六号、昭和四十六年四月。『狂言の形成と展開』（みづき書房、平成八年）所収。
- (26) 伊藤龍平『江戸の俳諧説話』翰林書房、平成十九年

本論にはいくつかの差別語が見られるが、これは歴史的なこととしてのみ使用したものである。